

平成二十七年 活動報告

平成二十七年「肥後医育 塾」年間テーマ「家族で見守 る健康」を開催

常任理事（事業担当） 遠藤 文夫

県民一人ひとりが豊かで健康的な生活を送れることを目指して、（公財）肥後医育振興会、（一財）化学及血清療法研究所及び熊本日日新聞社の主催で、年間テーマに「家族で見守る健康」を取り上げ、三回の市民公開セミナー（第五十五回～第五十七回）をホテル熊本テルサで開催するとともに、毎回、熊本日日新聞紙上で「肥後医育塾特集」を二ページに亘って内容を紹介しました。

病気に対しては、自分自身が予防等に気を配ることはもちろんですが、「家族」で病気に備えることも大事です。また、図らずも病気がかかってしまった時、一番心強いのは家族の支えであると思います。

そこで今年度の肥後医育塾では、年齢や世代、伝染する最小のコミュニティ、一番近くで支えあう存在などといったさまざまな視点を踏まえながら、いろいろな病気や健康について、それぞれの基礎知識について専門医の先生方から分かりやすく解説していただきました。

第五十五回は八月二十二日（土）にホ

テル熊本テルサにおいて、「泌尿器科の病気を知らう！」と題して開催しました。泌尿器科は、腎臓・尿管・膀胱・前立腺・尿道・生殖器に何らかの症状がある時に受診する診療科です。尿失禁や過活動膀胱など排尿に関する病気、男性にみられる前立腺肥大症や前立腺がん、泌尿器科の救急で多くみられる尿管結石など、さまざまな病気があります。今回のセミナーでは、泌尿器科の病気について、それぞれの専門の先生方に病態や治療法などについて分かりやすく解説していただきました。

講演では、司会を肥後医育振興会常任理事の遠藤文夫が務め、座長を熊本大学大学院生命科学部泌尿器科学分野教授の江藤正俊先生にお願いしました。

最初の講演は、熊本大学大学院生命科学部泌尿器科学分野助教授の杉山豊先生から「急増する前立腺がん」と題して、前立腺がんについて、診断から治療までわかりやすく講演をいただきました。

講演の二番目は、国保水保市立総合医療センター泌尿器科医師の岡保伸先生から「男性の排尿障害～前立腺肥大症について～」と題して、標準的な治療から最新の情報までを盛り込んで、わかりやすく前立腺肥大症について講演をいただきました。

講演の三番目は、平山泌尿器科医院副院長の里地葉先生から「女性の排尿障害～過活動膀胱、尿失禁について～」と題して、女性に多くみられる過活動膀胱や

尿失禁に関して、診断から治療までについて講演をいただきました。

講演の四番目は、熊本泌尿器科病院泌尿器科医師の谷川史城先生から「尿管結石症について～その診断と治療～」と題して、私たちが悩ませるやっかいな尿管結石の診断や治療について、わかりやすく講演をいただきました。

講演終了後の質疑応答は、あらかじめ寄せられた質問に講演者が答える形で行いました。約四〇〇人の来場者があり、内容を、九月二十四日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。

第五十六回は、十月十七日（土）にホテル熊本テルサにおいて、「新興感染症から家族をどう守る？感染症新時代～未知の病原体はすぐそばに～」と題して開催しました。

アフリカ大陸を中心に大流行した「エボラ出血熱」や、日本でも死者が発生したマダニが媒介するとされる「重症熱性血小板減少症候群」など、今、新たな感染症に注目が集まっています。目に見えない怖さ、一気に広がってしまう怖さがあり、不安を抱く方も多いのではないのでしょうか。

今回のセミナーでは、「エボラ出血熱」などの新たな感染症からインフルエンザなどの身近なものまで、感染症の専門家による実情や予防法などについて分かりやすくお話しいただきました。また、熊本における感染症対策についてもご紹介いただきました。

講演では、司会を肥後医育振興会副理事長の山本哲郎が務め、座長を熊本大学エイズ学センター教授・センター長の松下修三先生にお願いしました。

最初の講演は、国立感染症研究所ウイルス第一部部長の西條政幸先生から「ウイルス性出血熱ってどんな病気？～身近に存在する重症熱性血小板減少症候群を知る～」と題して、日本における重症熱性血小板減少症候群の特徴や最近の研究成果（治療・予防法の開発など）とともに、今後の研究課題について講演をいただきました。

講演の二番目は、国立国際医療研究センター国際感染症対策室医長の加藤康幸先生から「エボラ出血熱～西アフリカにおける過去最大の流行から学ぶ～」と題して、エボラ出血熱流行の経緯を振り返り、得られた知見をまとめながら、流行の背景にあるものなどについて講演をいただきました。

講演終了後、講演者とともに熊本保健所所長の長野俊郎先生にも加わっていただき、パネルディスカッションが行われました。

長野俊郎先生からは、国の指針によって構築された熊本市の防疫体制や、エボラ出血熱やデング熱なども踏まえながら感染症の分類によって行政の対策が異なることの紹介がありました。

約一五〇人の来場者があり、内容を、十一月十二日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。